
サンタクロースは恋人

卯月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンタクロースは恋人

【NZコード】

N0551D

【作者名】

卯月夜

【あらすじ】

X'masが近づくにつれ、小さな想いは大きくなる。自分に好意を持つてくれていてる幼馴染みを目の前に、逃げていた本心をぶつける。『私はあの人があ

プロローグ（前書き）

初めまして。この小説はクリスマス小説企画 クリノベ2007に参加してます。私以外に四人のサンタ（小説家様）がいます。そちらの小説も是非読んで下さい。よろしくお願ひ致します。

プロローグ

去年のクリスマスに会ったあの人を忘れられないでいる。

無意識にでも確かにあの人を探してゐる。

でも私はその人の名前も歳も

素顔さえ知らない。

11月17日

あと一月と数日でクリスマス。

クリスマス……私は独りなのかな？

慣れてるはずなのに去年のクリスマスを思い出すと

寂しい……

私のサンタ

もう一度、会いたい。

【幼馴染み】

肌寒い季節になつた。

落ち葉が冷たい風に吹かれ舞い続け、吐く息は白い。

通学路を歩く同じ制服を着た集団の中に、マフラーに顔をひざめている女の子がいた。

腰の高さである髪の上からマフラーを巻いている。

周りでは、おしゃべりと明るい声が交わされる中、その女の子だけは別世界にいるような冷ややかな表情だった。

「花鈴ー。」

自分を呼ぶ声に気付いた女の子は足を止めて振り返った。

そのままでの無表情は変わらなかつたが、現実には戻つたようだ。

「…………はよ。隆ちゃん」

手を振り笑顔で駆け寄つて来た男はズルツとコケた。

「ちやんは止めー」

そのままでも一いつ矢かだつた表情が一瞬で消えた。トボトボとへ口

ミながら隣に並ぶと、一緒に歩き始めた。

「相変わらず一人か?」

「……必要ないから」

溜め息をつく隆一を、うつとおしそうにしている花鈴。

「でもなあ幼馴染みの俺だけいつも言つのもなんやし……」

「別に……私は気にしない」

ズレたマフラーを直しながら花鈴が言つて、隆一は顔を歪めてボソリとそうかと言つた。

「…………お前は…………何でそつなんやろな。少しは人と生きる事を考えたらどうや?」

「私が嫌なら構わなくていい。隆ちゃんみたく私はなれない」

隆ちゃんは明るくて元氣で、頭も良い。ムードメーカー的な存在だから周りに人がたくさんいる。

わざわざ私に構わなくても良い。

「お前な……オレが何でお前に構つか分からんのか?」

「幼なじみだから」

「それだけとちやうわ。それに心配してるのはその物言いはめつちや腹立つわ」

学校の通学路、たくさんの人人がいるのに花鈴にとっては別世界の住民のようにしか思っていなかつた。

自分には関係の無い他人。

幼馴染みの隆一だけが唯一の

「……別に……いらぬ」

花鈴は立派すぎる幼馴染みが正直ウザイ存在でしかなかつた

【心】

小さい時から家政婦にお世話になっていた。

何日、何ヶ月、何年と期間は定まっていなかつたけど、ずっと同じ家政婦では無かつた。

雇う家政婦は親の気まぐれや、相手側の事情で代わつた。

好きになつても別れが来る。

必要以上に関わらない。

傷付きたくなかった。

心の自己防衛が、無意識に身に付いていた。親に対しても。

そのせいか一人に慣れ、独りでいる事を望んだ。

幼馴染みの隆ちゃんは

保育園からの付き合い。

すでに心を閉ざしている無感情の私の何が気に入ったのか、明るく話しあげて来た。

無理矢理遊びに付き合わされ、その明るい自分勝手さが嫌な時もあつたけど

でも私の唯一の友人だと思つてゐる。

『花鈴』

私の名をひやんと呼んでくれるのはあなただけ

それが時々暖かく支えになる時もあるけれど

私はあなたのようにあなたが好きではない。

『何でオレがお前に構うか分からんのか?』

分かる。

分かるに決まっている。

幼馴染みとしての付き合いが長いから。

でも分からない。

分かりたくない

私はあなたを愛してないの。隆けやん

どうしてもあなたを愛せない。愛したくない。

だから早くこんな私を嫌いになつて……

こんな私を見捨てて幸せになつて……

それが

それだけが私の願い

願う心も無くした私が今は願つ。

どうか

「私を嫌いになりますよ！」

「めんなさー…… 隆一

【無】

11月27日

テスト週間に入っていた。部活もない。いつもは一人で帰っていた帰路。今は隣に隆一がいる。

「……でな！ 先輩が……」

隣に並んで歩いている隆一は楽しそうに部活の話をしている。

花鈴はそれを黙つて聞いている。相づちすら打たず、ぼんやりしながら心の中で寒いなと思っていた。

上の空の花鈴に気付いた隆一は急に黙り込む。うつすら態度に怒りが出ていた。

でもいつもの事なのか花鈴は何も言わないでいる。

「あのや……花鈴」

「……」

ハアと息を吐き、白い靄を見ながら「一のポケットに手を入れる。

それでも寒いなと花鈴は思いながら、隆一の存在を忘れかける。

「聞いてるんか？ 花鈴」

「えつ……あうん」

空返事をする花鈴にムツとする隆一。

足を止めるところがみこむ。

花鈴はそれに気付かず、足を止めない。

二人の距離が開く。

隆一は数秒後、立ち上がった。

「……ツ

バシッと音が鳴ると花鈴はよつやく足を止め、振り返った。

「……

後頭部が冷たい。隆一に雪玉をぶつけられたから。

無表情に隆一を見ると何も言わず、踵を返しまた歩き始めた。

「花鈴！」

隆一が呼ぶが、花鈴は足を止めない。雪をぶつけられた怒りも表さない。

「花鈴！ お前人の話くらこちゃんと聞けやー いきなり雪ぶつけられて怒らんのか！」

距離が離れる。自然と隆一の声が大きくなる。

でも花鈴は何も言わない。

「花鈴……お前なあ」

「…………別に…………」

花鈴がボソリと小さな声で

「隆一に頼んでない。一緒にいてなんて……」

その小さな声が聞こえてしまった。隆一は一瞬悲しそうになると、怒りを露にする。

「頼まれて一緒にいたら友達ちゃうわー いい加減にせいや！ 僕はお前が……」

「頼んでない」

ブチッとキレた隆一。

「お前なんか知るか！ 好きにせいやー」

そう言つて反対車道に渡つて行き、姿を消した。

花鈴はそれを黙つて見送るとハアと白い息を吐きながら歩き出す。

たつた一人で

【哀】

私がこんなんだから隆一とはよく喧嘩をしていた。

大概、次の日に怒りの冷めた隆一がまた明るく何も無かつたように話し掛けて来る。

でも今回は違つた。

テストが始まり終わっても会いに来ない。今も。

毎日嫌つてほど顔を見ていた。

それは隆一がわざわざ私に会いに来ていたからだと改めて感じた。

でも人として欠陥している私は、たつた一人の友人と会えないことすら何も感じなかつた。

会いたいとも思わない。
逆に今は穏やかだつた。

隆一がいると現実が見えたから、時間の流れが分かつた。

それは私にとつて生きていると嬉しい。

でも今は周りにどれだけの人がいても独り。

この心地好さがずっと続けば良いと思つてしまつ。

隆一の事を思うと……

胸が痛む。罪悪感。

隆一は私を構うのは私を哀れんでいるからだと思つ。

それも嫌だけど一番重いのは好きだと言つ気持ち。

どうしたつて

私が私のままだと隆一を好きになることはない。
私は隆一の為に変わりたいと思わない。

今の私を受け入れてくれて
私もこの人と歩みたい

そう思える人に私は出会つてしまつた。

だから私は

隆一に言わないといけない。

私は

最低な人間だと

【06・12・24】

2006年12月24日

街はクリスマス一色。

店頭でサンタクロースの格好をした人達がチラシや無料プレゼントを配っている。

外にまで聞こえる軽快なクリスマスソング。聞き慣れたその曲はいたる所で流れている。

小さな子供は楽しきから歌い、その光景を微笑ましく見ている家族連れや、恋人、友人。

それぞれ、みんなクリスマスイブを楽しそうに過ごしている。

そんな中、一人で黙々と歩いている女の子がいた。

浮かれた周りの人達は気付いていない。彼女が泣いているのを。

長い横髪で顔を隠し、零れる涙を手で必死にぬぐつと、立ち止まつた。

『……花鈴？　お金は足りているでしょ？　あなたももう子供じゃないんだから自分の事は自分でしなさいね』

子供じゃない？　ダカラ
お金？　ソレダケ

仕事がそんなに大事ならどうしてワタシナンカラ

そう思つた。

いつもいつもお金お金。子供じゃないって子供の時も家政婦に任せっきりで、親らしい事なに一つ

してくれなかつたくせに！

涙が止まらない。思わず家から飛び出していた。クリスマスいつものこと。一人。

雪が降りそくなぐらい寒い夜。
明るい街、明るい人達にとつては寒くないのかも知れない。
けど私は寒い。

寒いサムイ寒い寒いサムイ寒い寒い寒いサムイサムイ寒いサムイ
サムイサムイ寒い寒いサ……ムイ

どうしようもない孤独と、張り裂けそうな辛さでいっぱいになつていた花鈴の耳に声が聞こえた。

花鈴が顔をあげる。少し離れた所、でも視界に入る距離にサンタクロースがいた。

笑顔で子供にプレゼントを渡していた。とても優しい笑顔。

プレゼントを貰った子供は嬉しそうに受け取り。明るくありがとうと言つている。

「……」

花鈴はしばらくその光景を見ていた。自然と涙は止まっていた。
さつきまでの心の寒さも

花鈴はグッと手を握ると下を向いたままサンタクロースに向かつて歩く。

真っ赤な衣装のサンタクロースは、田の前から近づいてくる女子に気付いた。

自分に向かつてくる女の子を田の当たりに、何事かとギョッとして

ている。

「 ッ

サンタクロースの目の前でピタッと止まる花鈴。
しばらく硬直状態。

「あ……あの……どうかし……」

思わずサンタクロースが沈黙を破り、訊ねる。

花鈴はゆつくりと目線をあげ、拳の人差し指を伸ばし、サンタクロースをビシッと指差した。

「あなたサンタクロースでしょ？ 子供の願いを叶えるのが仕事なら私の願いも叶えなさい！ 私も子供なんだから！」

息巻いた花鈴は一気に言い終わると、指差していた手を下ろした。

サンタクロースを真っ直ぐ見詰める花鈴。
力が入りすぎて睨んでいるように見える。

たまたま花鈴の視界に入つただけの通りすがりの哀れなサンタクロース。

初対面でいきなり無茶苦茶な事を言つた女子に呆然としていた。
でも少しの間を置いて

「いいですよ。何がお望みですか？」

とさつさと供達にプレゼントを渡していた時の優しい笑顔で言つ
てきた。

優しい笑顔と口調。欠片も嫌がる素振りは無かつた。

「なつ？」

サンタクロースの対応に、花鈴の方が予想外だったのか驚いてい
る。

皿をまるくし、口がおもいつきり開いている。

「構いませんよ。何でも言つて下さい」

更に爽やかにそつ言われ、頭の思考が止まる。

怒られるか相手にされないと思っていたから。

花鈴はとつさに

「そ……それなら……こ・恋人！」

「恋人？」

「そうよー！ サンタクロースが恋人なんて素敵じゃない」

恋人と言つてしまつた。

こんな願い受け入れるはずがない……

馬鹿じゃない？ と言われるのが普通

「いいですよ」

！-----！

こうしていつも一人だったクリスマスをサンタクロースと共に過ごす事になった。

【独

多少の事じや動搖なんかしない、けど親の事となると感情が揺れる。

いくらあの留守電を聞いて感情が高ぶっていたからって初対面の赤の他人に

さつきまでの憤りも落ち着いた今は、ただただ恥ずかしい。

こんなに恥ずかしくて穴があれば入りたいと思つたのは初めてかもしれない

「……あ……の」

花鈴が氣まずそうにサンタクロースにて、目線を向ける。

派手な真っ赤な衣装と白ヒゲ、かなり目立つ。

今日はクリスマス・イブ。

周りにたくさんサンタの格好をした人達がいる。

今日のこの日、サンタクロースの格好をした人がいても可笑しくない。

でもすぐ隣で並んで歩いていると、恥ずかしさがあつた。

「何ですか？」

「あの……すみません」

そう言つのがやつとだつた。さつきの自分の言動を思い出し、顔は真っ赤になつてゐる。

顔を上げれず、うつ向いたまゝ。

そんな花鈴をクスッと笑うサンタ。ちゃんと見えるのは旦だけ。

素顔はヒゲで隠れている。

サンタの格好、顔も全部は見えない。明日になれば他人。

気が楽になつたのか、半ば開き直り花梨はいつもよりお喋りだつた。

「あなたの名前は？ 私は花梨です」

「サンタクロースです」

「まさか……サンタクロースで通すの？ 怒ってるの？」

「花梨が望んだから……サンタクロースが恋人なんて素敵？」

ボツと火がついたように一気に真っ赤に。サンタクロースは花鈴の反応を面白がってまたクスクス笑っている。

「わ・分かったわよ。でサンタさんはもうプレゼント配らなくていいの？」

子供達にプレゼントを配つてる時の、優しそうな笑顔を見たらなんだかムカムカして

少し困らせたくなつただけなのに。天罰かしら……ハア

「丁度最後の一 個を配り終つたら花梨が私の」

「キヤーーー！ 止めてよもつ」

改めて思つと、とても恥ずかしい発言。

平静を取り戻した花鈴は半泣き状態でサンタクロースの言葉を遮る。

ずっと余裕ありのサンタクロースは二三二二笑顔を絶やさない。

「 今夜はクリスマスイブ。みんなこの日は楽しむのですよ」

そう言いながら花鈴の手を掴み、やや卑足でグイグイと引っ張りどこかに向かっていた。

街の中心に近づいてるせいで人波がすごい。

花鈴は、行き先も分からぬままサンタクロースについて行く。

ハアとため息をつきながら花鈴がなんの気なしに聞いた。

「ねえトナカイさんはどう? サンタさん」

「トナカイですか? いりますか?」

「いりますかつて……」

サンタがポケットから何かを取り出ると花鈴に手渡した。

「トナカイ」

「どうぞ、差し上げます」

小さな小さなトナカイのマスク。とても可愛い。

「つてトナカイをあげるサンタなんかいない」

「ここにいますよ。良かったですね。恋人がトナカイをあげるサンタで」

「なつ」

「花鈴からはプレゼント無いんですか?」

|面白がっているサンタは更に花鈴を囮らせ遊んでいる。

「無いー！」

「冷たいですね」

サンタが冗談まじりに笑顔で言った。

でも 冷たい その言葉がサンタの口から出たと同時に、ビクッと体を強張らせ、固まる花鈴。

あまり深い意味で言った訳では無いだろひサンタの言葉で、花鈴の顔が曇つた。

口数も減り、無表情へと変わる。

「？」

サンタがそれに気が付き足を止めた。しゃがみ込み、うつ向いて

いる花鈴の顔を見ながら優しく聞いた。

小さな子供に対するように優しく接するサンタ。

「……どうしたんですか？」

優しい声、優しい笑顔、優しい瞳

誰にも言つた事が無い自分の気持ち、今までの事、悲しさ。

花鈴は思わず口に出していた。

「私は……クリスマス親と過ごした事も……プレゼントを貰った事すらない。……冷たい。から。私は愛されてない」

震える声、涙のたまつた瞳、唇を噛み締め悲しみを必死に堪えて
いる。

「花鈴……」

サンタは優しく花鈴の頭をなでながら少し悲しそうに微笑む。

「花鈴……親が全てじゃない。君には君の大切なものはないの？」

「な……い。そんなの……いらない。意味がな……い」

「そう。花鈴には花鈴を心配してくれる人はいないの？ 親以外に花鈴に声を掛ける人はいない？」

「…………」

「花鈴と向き合おうとする人はいないの？」

「い……る……でも私は」

「花鈴、周りが変わることをずっと待ち続けるのは辛くて苦しい。親が変わることを待つんじゃなく、今、花鈴に声を掛けてくれる人と向き合つてみたら？ どんな相手でも」

「分かん……な……い」

「変わることを待つんじゃなく、花鈴が少しずつ変われば今の場所から抜け出せるよ。親と向き合いたくても向き合えないのは悲しいけど、親が全てじゃない。それに今がダメでもいずれ向き合える日が来るよ。必ず。その為にも、今は 意味がない 花鈴がそう言ったものと向き合つてみたら？ ……ね？花鈴」

花鈴はただ首を左右に振った。

「花鈴……ずっと 其処 にいるの？」

サンタは悲しそうに言つと、立ち上がつた。

花鈴の手を取ると再び歩き出した。

人波を搔き分け、無言でひたすら歩き続ける。

進むにつれ道を行き交う人はだんだんと増えていく。

人と人の隙間をすり抜け、手を繋いでいないとはぐれそうな人混みから、満員電車のように人が集つている場所に行き着いた。

「着いたよ」

サンタクロースが立ち止まると指を差す。そこには大きなクリスマスツリーがあつた。

サンタの言葉で顔を上げた花鈴の目の前に、天にも届きそうな大きな木があつた。

可愛く飾られた木は、イルミネーションがまばゆく光を放ち、とても綺麗だった。

周りにはツリーを見に来たたくさんの人達で埋め尽くされていた。

花鈴はクリスマスいつも一人だった。

こんなにたくさんの人の中で、こんな綺麗なツリーを見ながらクリスマスを過ごすのは本当に初めてだった。

ポロッ

花鈴はツリーを見上げたまま静かに涙を零していた。

サンタクロースは花鈴の手を握つたまま、涙を流す花鈴の横にいた。

「暖かい……」

花鈴がそうつぶやいた。

花鈴の無表情の顔からは涙が流れ、ツリーを見上げるその姿はとても見ていて切なくなる。

サンタはそんな花鈴の横顔を優しく見詰め、ツリーへと視線を変えた。

高いクリスマスツリーを見上げながら花鈴に一言

「大丈夫だよ」

そう言った。

何が大丈夫なのか花鈴には分からなかつた。でも見上げるクリスマスツリーはとても綺麗で、周りの人達は明るく楽しそうで

花鈴にとってそれはとてもなく暖かかつた

初めて人を人だと思った。

暖かいと

大丈夫そう言ったサンタクロースが時計を見る。

「もうすぐ12時だね」

そう言つた数十秒後、大きな鐘の音が鳴り響いた。

「メリークリスマス」
「メリークリスマス」
「メリークリスマス」

人々がみんなそう言つていた。誰かれかまわず、近くにいる人に明るくメリークリスマスと言い交わす。

「メリークリスマス！　お嬢さんとサンタサン」

いきなり花鈴にそう話しつけてきた。花鈴はビックリしている。代わりにサンタクロースがメリークリスマスと返した。

「メリクリ！」
「メリークリスマス」
「メリークリスマス」

花鈴はただ戸惑つ。サンタクロースは笑顔で言った。

「花鈴もメリークリスマスって言つてあげたらどうですか？」

「私……私は……だつて

「ニッコリ笑つてメリークリスマスって言つてあげればみんな嬉しいですよ」

「そ……それだけで？」

「花鈴もメリークリスマスと知らない人に言われても何だが嬉しいでしょ？ 同じ時間と一緒に過ごしている証です」

「……」

花鈴は今まで感じた事のない感情があった。それはとても心地よく、一人じゃないと思えた。

花鈴は下向きだった顔をあげるとサンタクロースに顔を向ける。

「メリークリスマス」

その笑顔はとても清々しく、心からの笑みだった。

「メリークリスマス」

サンタクロースもそう返すと、花鈴は人の多い所に向かって行つ

た。

人の集まる塊に入り、笑顔でメリークリスマスと言つてゐる。花鈴が言えは皆もメリークリスマスと返し、皆が花鈴に言えは花鈴がメリークリスマスと返した。

そこには暖かい人達、暖かい笑顔、暖かい時間が流れていった。

しばらく経つと自然と人は少なくなつて行つた。

花鈴はサンタクロースの元に戻つた。

「あ……あれ」

確かにいた場所はここなのにそこにはサンタクロースの姿が無かつた。花鈴は一気に不安になつた。

必死にサンタクロースを探した。でもその目立つ赤い服を探すことはできなかつた。

「大丈……夫……」

花鈴はまた戻つてしまつた。人はいなくなる。ツリーのライトは

消える。

また一人

「大……丈夫……つて……何が? ねえ教えてよ」

寒い

やつぱり私は独りだった。

涙も枯れるほどの心の中にある虚無感

【涙】

テストが終わり、終業式まで休みに入った。

家で一人なにをするでもなく過ごす。今はもう家政婦を雇っていないから家事炊事を自分でしている。

親は　たまにしか帰つてこない。帰つて来ても会話すらしない。
季節ごとに服とかを大量に置いて行つたり、持つて行つたりそれだけ。

帰つても私の顔すら見ずに出で行つたこともある。

ワタシトイウソンザイハイツタイナンダロウ　?

そう思い続けるばかりで答えは見つからない。

辛くて悲しくて苦しい。

あの人言つた通り、ずっと変わらぬを待ち続けるなら、一生、私は此所にいないといけない。

でも私は私でしかない。

私は今生きている。

誰かの為とかじやなく、自分を生きる為に生きよう。

変わるんじゃない。私は私のままで生きよう。

そんな当たり前の事すら私は長い時間掛かってようやく分かった。

このマスクットのトナカイを見るたびにあの日のサンタクロースの言葉を思い出した。

いずれ必ず向き合える日が来る。

その日の為に

だからこそ

「花鈴？」

隆一を呼び出した。会って話したい事があるとそれだけ言った。

すぐに駆け付けてくれた。

あんな態度をとった馬鹿な私の為なんかに

「花鈴が俺を呼び出すなんて初めてやん？ 何かあったん？」

慣れ親しんだ声が聞こえる。

いつもと変わらない表情。

いつもいつも心配そうに私を見ている。

あの人と同じ優しい瞳、私を気遣い口端をあげている。

いつも

いつも隆ちゃんは私だけを見ていてくれた

「花鈴……俺、お前に会わん間ずっと考えてな！ やっぱはつきりしよひ思ひたんや！ あんな俺……お前に言いたい事があんねん！」俺は……俺は

少し赤くなる頬。

緊張からか顔を合わせない。

いつもと違う態度。

これは私に対する隆ちゃんの気持ち、しっかり受け止めなこといけない。

ずっと逃げてた。

向か合わないといけない。

「俺はお前が好きや」

一変して真顔になる隆一。

真っ直ぐ見詰めてくる瞳。

赤く染まつた顔。

言わなくちやいけない。

言わなくつけさせ

「ゴメンナサイ」

好きだと言われても何も思わなかつた。

ただその好意を重いと感じてしまった私は最低だ

一塵の迷いも無かつた。

隆一よりも、真っ直ぐ見詰め返す花鈴、その瞳からは今まで見たことが無い悲しみが映しだされていた。

「…………そ……か。やつぱり……ダメか」

隆一は苦笑いしながら、しゃがみこんだ。

長く一緒にいた二人。

花鈴が隆一を分かるように、隆一も花鈴の事が分かる。

でもそれでも気持ちは本当だからこそ、隆一は花鈴に想いを云えた。

返される言葉、気持ちが分かつていても

「今まで隆ちゃんが私の傍にいてくれた事すゞへ……すゞく感謝します。ありがとうございます」

花鈴が悲愴に顔を歪ませる。

「でも……私は隆ちゃんをビリしても愛せない」

「…………どうして？」

「隆ちゃんは私と違います」

「違くて当たり前やん。同じ人間なんかおらん」

「違うのは環境よ」

「……」

「あなたには暖かい家族、暖かい友人、暖かい心を持つてる」

花鈴がうつに向く。

「だからあなたには私の気持ちが分からぬ。私はあなたを妬む気持ちや……憎む気持ちがどこかにある。……隆ちゃんは嫌いじゃない……でも……好きでもないわ」

とても冷たい。

傷つける言葉だと分かっている。

でもこれが本心。

今まで逃げてた。ぶつからなかつた。

隆一と本心で向き合つ事がこんなに辛いとは思わなかつた

「…………私…………好きな人が…………気になる人がいるの」

「…………うか…………そうやつたんか。俺の知つどるやつか?」

「隆ちゃんの知らない人よ。私も全然知らない」

「…………ハツ? 何言うてんの?」

隆一が立ち上ると首をかしげる。

花鈴は少し目線を下げると、ハアと息をつき言った。

「名前も素顔も知らない人よ。去年のクリスマスに会つた街角にいたサンタクロースよ」

啞然としながら隆一は更に首をかしげた。

「い……今までの中で一番オモロイ話やけど……マジで言つてるんか?」

花鈴は無言。

花鈴の性格を知っている隆一はその態度で「冗談も嘘も言つていないと察知する。

「な……んで? そんなやつの何が好きやねん! 名前も素顔さえ知らんのやろ? 花鈴!」

隆一は花鈴の腕を掴むと、堰を切ったように問う。

花鈴は横を向いて、目線を合わせない。

「あなたには分からない……私は……私はあの人人が好きなのよ。ずっとずっと……あの日からあの人を想わない日は無かつたわ。だってあの人はずっと一人だった私と初めてクリスマスを過ごしてくれた人だもの」

「たつた……それだけ?」

バシツ

花鈴が隆一の手を叩きはらい、睨み付けた。

「そうよ……たつたそれだけよ。でも私にとつてはとても大きなものだったわ！ あなたには分からぬい！！」

誕生日だって

お正月だって

一緒に過ごしたことなんかない。

いつもいつも一人で寂しかった

自分の誕生日を祝つて貰えないのは辛かつた。でも家政婦さんがその日だけはケーキを買って来てくれた。優しくしてくれる人がまだ誕生日にはいてくれた

一番寂しい日はクリスマスだった。

周りはサンタクロースからプレゼントを貰つて楽しそうで嬉しそうで

何で私にはサンタクロースが来ないんだろうと思つた。

ずっとずっとサンタクロースを待っていた。

私の私だけのプレゼントが欲しかった。

クリスマスは家政婦さんも家族と過ごす為に、すぐに帰った。

サンタクロースなんていない。

サンタクロースが親だと知った時、幼かつた私がどれだけ傷ついたか

ダカラワタシノトコロニハコナカツタノカ

「隆ちゃんなんかには分かんない！ 分かるわけない！」

息を切らして怒鳴る花鈴。

隆一は今まで見たこと無い花鈴の悲痛な叫びを聞き、顔を歪ませ小さくゴメンと言つた。

しばらく沈黙は続き、落ち着いた花鈴がポツリポツリ話し出す。

「私は一人だつたから……あの日見たクリスマスツリーとたくさんの人達がとても暖かかった。貰つたプレゼントも。でもそれはクリスマスだけ……一瞬だけの暖かさだった。私は愚かだからまた戻つてしまつた。人を人と見ない無感情の自分に……」

雪が振り始めた。

「でもクリスマスが近づくにつれ……思い出す……やつと私は……分かり始めた。親が全てじゃない。向き合つとは何か……私はやつぱり……隆ちゃんが好きだよ」

ボタ

花鈴の目から涙が溢れた。

「寂しくて辛い時……隆ちゃんの笑顔で救われた事がいっぱいある。隆ちゃんがいてくれたから私は……今までの此所にいた。でも私

は……私は隆ちゃんみたいに人を好きになりたい。自分を生きたい。生きる為にも隆ちゃんと本心で向き合いたかった。酷い事言つて、『メンナサイ』『ゴメン』『ナサイ』

「花鈴……名前すら知らんそいつが……そんなに好きなんか？」

「分から……ない。でも今はあの人の事が知りたい。あの人に会いたい」

「俺と会えんくてもそりは思わんかったんや？」

「ゴメ……ンナ……サイ」

「…………好いや。好きやすりとすりと好きやつた」

「あり……がと。ありがとう隆ちゃん」

「俺は花鈴を愛してる。だから花鈴が幸せになつてくれる事が一番の願いや。相手が誰であろうと構わん。俺はこれからも花鈴の友人やからこつでも何でも言つてやー。それくらいエエやろ?」

「…………う……ん。うん。あり……がと。隆ちゃん……こんな私の側にいてくれて」

隆一は泣く花鈴を抱き締めた。

「俺こそ……何もできんかつて……気持ちすら分かれんで『メン

花鈴は首を横に振る。

「ほんまに……好きや……好きやつた花鈴。花鈴……頑張りや

繰り返し隆一は頑張れと言った。

本当に好きだった。同情でも哀れみでも本当に好きだった。

ありがとう隆ちゃん

こんな私の側にいてくれて

隆ちゃんは私にとって一番大切な友人です

これからもずっと

【Merry Christmas】

2007年12月24日

去年のクリスマスからずっとあのを探していた。

今まで見ようとしなかつた行き交う人の顔を目で追い、あの人が
も知れないと言う淡い気持ちを胸にずっと探していた。

でもたくさんの人達の中で、名前も素顔も知らないあのを探す
事は出来なかつた。

もう一度と会えないと諦めてしまった。また下を向き、たつた一
人だと思い込み、声を掛けてくれる人と向き合う事すらしない。

あの人があの言葉を思い出しては苦しくて悲しかつた。

大丈夫 そう言ってくれた言葉にしがみついて、もう一度会いたいと願つては諦めた

『花鈴』

私を見て嬉しそうに笑う隆ちゃんどぞ何を企ねば良いのか分からなかつた。

向き合つのに時間が掛かつた。

隆ちゃんは分かつてくれたと思つ

『頑張りや』

どんな時でも私の味方でいてくれる。

ずっと変わらない隆ちゃん。

ずっと友人だと言つてくれた優しい人。

ありがとう

私はもう一人じゃない

だから恐れずに

「行こう」

前を向いて、歩き出す。

結局私は忘れる事なんて出来ない。

あの人に会いたい

もう一度会いたい

もう一度

花鈴は立ち上がり、家を出た。去年は泣いて飛び出した。

でも今は違う。自らの意思で歩き出す。

去年と同じ、X-mas。

街は華やぎ賑わう。目につく赤い衣装。流れるクリスマスソング。変わらない幸せそうな人々。

同じ

「…………」

でも去年いた場所にサンタクロースはいなかつた。

期待していただけにガッカリする。

「…………諦めちゃダメ」

花鈴はギュッと拳を握ると、顔をあげてサンタクロースが去年プレゼントを渡していく場所に佇む。

来るか分からぬサンタクロースを出会った場所で待つことなし

た。

田の前ではたくさんの人人が行き交う。

子供と手を繋いでいる家族、腕を組み幸せそうな恋人、プレゼントを抱えて早足で通りすぎる人。

花鈴はそんな人達の中で、サンタクロースを待ち続ける。

何分、何十分、何時間。

無情にも時間だけが過ぎる。

それでも花鈴は帰ろうとしない。寒さで顔色の血は引き、体が力々カタ震えている。

「……ツ」

花鈴の心が挫けそうになつた。

弱気になるなと自分を励まし、更に時間は過ぎ去る。

「……お……願い。お願ひあの人……会わせて」

花鈴は手を組むと、口に押し当てた。神に祈りを捧げるようになつた。

死に願つた。

あの人に会いたい

お願い会わせて下さい

「……………」んばんわ

声を掛けられ、バツと顔をあげた。懐かしい声

「あっ……」

皿の前にはマフラーを巻いた長身の男がいた。

優しい瞳、優しい声、優しい笑顔。

花鈴は言葉を無くし、佇む。

男がクスッと笑う。

「去年と逆ですね。すぐに分かりました」

花鈴はハツと我に返ると、緊張で高鳴る鼓動を必死に静めようと、落ち着け落ち着け落ち着けと心の中で唱えた。

「まさか……また会えるなんて思いませんでした。去年のX-masは、友人の代わりにプレゼントを配つてただけですから……でもどうしたんですか？ その格好」「

「こ・これは」

頭から足まで赤に包まれていた。

それは紛れもなく、サンタクロースの衣装。

首から紐に通したトナカイのマスク Gottが下がっていた。

道行く人はどうしたって花鈴の目立つ服に目を向けてしまう。

その効果は目の前に

「私……」

スウッと深呼吸すると、男に向かつてビシッと指を差した。

「サンタクロースに何か願い事は無い？！」

何時間も寒空の下で待っていた花鈴の鼻は真っ赤だつた。

去年とは微妙に違うが、彷彿させるその言動に男は一瞬驚くとフワッと笑つた。

「恋人？」

男が半分冗談に聞くと、花鈴は真顔で見詰めながら手を下ろした。

「X - mas……だけ？」

花鈴が弱々しく訊ねると、男は首を傾けながら、今と今までの想いを話だした。

「去年の……X-masに会った女の子はどうしてるかな？ つて時々思い出しては気になつてました」

男は目を伏せる。

「フツとあなたの事を思い出し、何となく、じこに足が向いていました。……去年、彼処で会つたなとやしたら赤い服を着たサンタの女の子がいるなつて見ていきました。……よく見たら去年会つた花鈴だと分かりました。だから声を掛けました」

男はただ偶然この近くについて、去年の事を思い出し何となくじこに来たと説明する。

「私は……ずっと……貴方を待つていた。このトナカイを見るたびあなたの言葉を思い出した。私は私を変えない。だけでもう親や周りが変わることを待つのは止めたの」

「そうですか」

「私は……貴方が好きなんだと思つ。ずっとずっと貴方に会いたかつた」

ポタッ

花鈴の目から涙が流れた。

去年と違つ。

悲しいから泣いてるんじゃない。

会えた嬉しさで自然と涙が溢れた。

「花鈴……」

男がハンカチを取り出すと、花鈴の目にあて涙をぬぐつ。

「花鈴、今すぐ本当の恋人になるのは無理です。お互いを知らなさ
するから……でも」「

男が花鈴に手を差し伸べる。

「今日はX-mas。サンタクロースにお願いをしても良いですか
?」

「はい」

「恋人になって下さい。サンタクロースが恋人なんて素敵ですから
後もう一つ」

「？」

「出来れば友人からお互ひ分かりあい仲良くしていきませんか？
俺の名前は静岡聖です」

花鈴は涙でグシャグシャな顔をハンカチで隠しながら顔を上げた。

また会えた喜びと、これからもずっと会える嬉しさ。

男の言葉に花鈴はまた涙が溢れた。

「わ・私は春山花鈴です」

会いたくても会えなかつた。

何度も諦め、でも無意識にすれ違う人を目で追い掛け、会いたい
想いは募るばかり

好きなんだと自覚するのが遅くて、また時間を無駄に過ごした。

私は一人じゃない。

一人にはなれない。

それが分かつた時、ようやく向き合えた。

私はもう一人じゃない。

これからもずっと。

Merry Christmas.

【Merry Christmas】（後書き）

読んで下さりありがとうございました。

こんな稚拙でショボイ小説ですみません。

こんなあやふや構成な小説で本当に申し訳ありません！！

この後は多分、花鈴は幸せになると想います。隆一はモテるけど花鈴が好みだからきっと良い子と付き合つと思します（ ） b

隆一とくつつけようかなあと途中思いましたが『サンタクロースが恋人』の題名の為に断念しました。

わけわかんない小説だと思います。表現も下手ですみません。

これからも頑張りますので直しくお願ひ致します。

本当に読んで下さり感謝致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0551d/>

サンタクロースは恋人

2010年10月10日02時26分発行